

馬場大助克昌に関する一資料

— 江馬元益「東海紀行」の記述について —

岩 佐 伸 一

一 はじめに

従来、馬場大助克昌（註1・以下克昌と称する）の事績が紹介されるにあたってはほとんどが彼の記した、または編纂にかかわった図譜によるところが多かった。確かに彼は生涯に百冊を超える図譜類を作成し、それらを検証することにより彼の博物学に対する姿勢が明らかになるであろうことは言うまでもない。しかし、筆者はそれだけでは彼の全体像をつかむには不十分と考える。なぜなら、彼は旗本という身分を活用し、また、公務の余暇に自らの興味を満たしていたからであり（註2）、ゆえに彼を研究するにあたっては公的な仕事の面も承知しておく必要があると思う。またその地位から大名や旗本、御家人、幕府に勤務する専門家との交流もあり、その人々が見た克昌の姿も知っておく必要があると考える。

本稿においてはそのような克昌と親交を結んだ人々のうち、大垣藩医・江馬元益の記した「東海紀行」（「藤渠漫筆」九編 卷三）に見られる克昌像を紹介し、若干の考察を示しておきたいと思う。

さて、ここ二十年間ほどの克昌または緒鞭会に関する研究史についてはごく簡単ではあるが拙稿（註3）にて触れておいた。更に以前を含めたその概略としては、おおよそ明治期は緒鞭会会員（以下会員とする・註4）の事績や伝記を列挙するにとどまり（註5）、昭和初期以降次第に緒鞭会というまとまりを視野に入れ（註6）、博物学の通史に取り上げられるようになる。戦後は原資料の発掘とその分析に基づき個人および緒鞭会の具体的な活動が

示されるようになった（註7）、と筆者は考えている。現在でもその作業は続けられており今後の集大成が待たれる所である。もちろんこれらは博物学史がより大きな自然科学研究史の中において重要性が認識されたことによるものであり、戦前までの研究者がその認識をさせるために多大な業績を挙げたことに異議を唱えるものではない。しかしながら具体的な資料を挙げ、それを精緻に分析して会員および会の実態が明らかにされはじめたのはごく近年のことであるといえよう。

以下、本稿においても具体的な資料に基づき克昌の博物学に対する姿勢の一端を紹介したいと思う。

二 江馬元益とその著「東海紀行」

江馬元益について

江戸時代後期の美濃国、特に大垣においてはオランダからもたらされた西洋の医学や自然科学の研究が盛んに行われ、前者は江馬元恭（春齡、蘭齋とも）、後者は飯沼慾齋を代表として挙げることができる。他にも江戸生まれであるが宇田川榕庵（大垣藩医・江沢養樹の長男）など西洋の自然科学を日本へ導入した先駆けをなす人々を輩出した。

さて、江馬元益は文化三年（一八〇六）に大垣藩医・江馬元恭の長男として生まれ、明治二十四年（一八九一）に数え年八十六歳で亡くなった。名を元益、椿、家督を相続してからは春齡を名乗り、隠居後は活堂と号したという（註8）。幼年より蘭学を学び、文政十三年（一八三〇）、父の跡を継ぎ大垣藩主戸田家に仕え、天保三年（一八三二）以降、五回にわたり江戸に下って勤めを果たす傍ら多くの人々と親交を結んだ。『江馬活堂傳』（註9）によると頼山陽、佐藤一斎、司馬江漢、宇田川榛齋、新宮涼庭、小石元瑞、伊藤圭介らを知己として挙げている。万延二年（一八六一）に致仕するまで、約三十年間にわたり藩医として仕え、その一方家塾において多くの門人を育成

した。

博物学に関しては水谷豊文や山本亡羊らの教えを受け、自宅に一千種を超える草木を栽培し、それらを写生する際には絵師に頼らず自ら絵筆を執ったと伝えられている。彼の博物学関係の著作としては『草木図彙』（註10）や『藤渠介品図譜』（註11）等があり、他にも医学関係、随筆など多くの著作を遺している（註12）。

『藤渠漫筆』と『東海紀行』

元益は蘭方医として活躍する一方、世の中の様々な出来事に対して多大な関心を示し、かつ自らの意見を持っていた。それらを記したのが『藤渠漫筆』四十編百十冊であり、現在でも江馬家に伝来し、一部の写本が各機関に所蔵されている（註13）。彼が生きた江戸時代後期から明治中期までの激動の時代を物語る好資料であり、多くの研究者が関心を寄せているが、現在のところ全編が活字化されたことはない（註14）。その内容は多岐にわたり医学や蘭学はもとより、西洋事情や政治、宗教、歴史、伝説、事件事故、名所旧跡、人物などに及び、取り上げる時代も歴史上のことから元益と同時代のことまで、書物や風聞による情報だけではなく自らの体験も交えており元益の興味の幅広さがうかがわれる。

この随筆中に「東海紀行」「西帰紀行」（九編卷之三）がある（註15）。この記述は元益が三回目の江戸勤務を命じられた時（註16）の記録であり、天保十四年（一八四三）年六月六日にはじまり弘化二年（一八四五）十月十日までのできごとを記しており（概略は表①を参照）、医学はもとより博物学などに関心を持つ人々との交わりが記された価値のある記述と考える。

三 馬場克昌に関する事柄

「東海紀行」に克昌関連の事項があることは上野益三により紹介されてい

るが（註17）、元益と克昌の出会いのいきさつなど一部の事項に限られている。本稿においては克昌の名が出てくる箇所について管見の限りではあるが解説を試み、若干の考えを述べてみたい。

なお、克昌製作の図譜のひとつに『資生圃草木未詳品図説』（註18）がある。これは、克昌が栽培または見聞した渡来植物数品に関する自らの見解について元益の教示を求めたもので、双方の交流がかなり専門的なレベルに及んでいたことを示すものと考ええる。「東海紀行」からはうかがい知れない克昌の植物に対する考究の具体的なあり方を示しており、かつ元益との交流から生まれた書物であるためにあわせて考えると良いのだが、詳細な内容の検討は後日としたい。

本文①

ここは日時を明らかにしないが前後の記事からして天保十四年（一八四三）秋のことと推測する。元益が江戸菓鴨の花戸（＝園芸商）長太郎の紹介を受けて、克昌に面会し屋敷内や自筆の図譜を見た旨が記されており、このことはすでに上野益三によって紹介されている（註17）。克昌はこの長太郎から、種子や苗を入手しているだけでなく、植物名の呼称などの情報も得ており、克昌の博物学的関心をサポートする懇意な間柄であったといえよう。

続いて克昌の園中を実の弟である「藤里久作」なる人物が管理していたとある。『寛政重修諸家譜』（註19）や『馬場氏先祖書上帳』（註20）において克昌には兄（第九代当主・昌平、尚庸とも）が一人と弟が二人、妹が三人いたと記されている。弟は二人とも他家へ養子に行っているが「藤里」という姓ではない。他に弟がいたのか、またはこの二人の内どちらかが養家を出て姓を改めた可能性もあるが、現在のところ確認できる材料を持たない。

その次には屋敷内の様子とその人柄が記されている。克昌の屋敷跡については上野益三による検証（註21）がなされているが、『諸向地面取調帳』（註22）に「居屋敷 芝切通上 千八百坪余 馬場大助」とあるのははじめ、江

戸切絵図のうち「芝口南西久保愛宕下之図」（版元尾張屋 万延二年版）や現在の形状などからして現在の東京タワー敷地に隣接する位置であったことは間違いないだろう。

続いて克昌が増山雪斎に絵を学んだことや、克昌自筆の写生図や図譜を見せられたことが記される。従来、典拠が示されないままに克昌は伊勢長島藩主・増山雪斎について絵を学んだとされてきたが（註23）、本人の言ではないものの親しく接していた人の証言として傍証に足るのではないかと考える。克昌には図譜以外にも十点あまりの絵画作品が確認できるが（註24）、それらから雪斎の影響を明確に指摘することは現在のところ難しい。しかし、雪斎も学んだ沈南蘋を祖とする長崎派の画風に通じる作品（註25）もあり、この件を確実なものにするには今後の資料発掘によるところが大きいと思う（註26）。

さらには図譜についての話が続く。克昌の手になる図譜は現在（表②）に示したものが確認され、そのうち『群英譜』には富山藩主・前田利保の序文があり、一見すると元益の記述に合致する図譜と思われるが、現在の『群英譜』には跋文がなく、さらに利保序文の款記が天保十五年一月となっており、本記事が天保十四年秋であるところから該当しないと考える。

続く記述には特に注目したいと考えている。従来、克昌は緒鞭会に関連づけて語られることがほとんどであったが、本資料からはそれ以外の博物学研究会にも参加していたことが明らかになった（註27）。そのメンバーの内、筆者が多少なりとも明らかにできたのは次の人々であり、「松平主水正」や「長谷川甚兵衛」については可能性のある人物が複数おり特定するには至らなかった。

土屋弥学・土屋求馬貞直。旗本。俸禄三千俵。屋敷は深川高橋にあり、本家の常陸土浦藩主・土屋采女正の下屋敷を借りていた（註28）。幕府内の役職としては寄合衆や使番などを務め、嘉永二年（一八四九）九月に没し

た。生年不詳。彼の博物学に関する事績は明らかにされていないが、養安院曲直瀬正貞問「江馬春齡答『本草問答録』」（註29）の十一丁表に掲げられる「マルバグミ」の行に春齡の答えとして「土屋弥学君ノ園中ニアリ」とあるところから植物に関心を持っていたであろうことが推察される。

佐橋兵三郎・節翁、四季園などと号する。旗本。石高八百七石。武蔵国と相模国に采地を持っていた。幕府内の役職としては西丸新御番組頭を務めた。緒鞭会にも積極的に参加し出席回数はかなり多い（註30）。『珍奇図説』『升麻図説』『柿品』などの編著に関わった。生没年不詳。

飯室庄左衛門・楽圃、千草堂と号する。旗本。寛政元年（一七八九）安政六年（一八五九）（註31）。『草花説』第一・第二、『虫譜図説』などを著した。

さて、克昌以上にあげた人物が参加していた物産会の様子についても『東海紀行』には記され、各人「奇品」を五種類づつ持ち寄って鑑定し甲乙をつけたという。ここでこの物産会と緒鞭会との相違点について見ておこう。まずはメンバー構成である。克昌や佐橋兵三郎、飯室庄左衛門らは緒鞭会のメンバーであったが、土屋弥学、松平主水正、長谷川甚兵衛らの名は緒鞭会出席者中には見られない（註32）。また、持ち寄っている品数も違う。緒鞭会のあり方を定めた「緒鞭会業軌則」（註33）においてはあまり多くの品物を対象にすると精密さをなくすおそれがあるので、検討を加えるのは一回当たり四、五点を限度とするとしている（註34）。似たような点としては「鑑定シテ其甲乙ヲ記スル」点であり、後出の緒鞭会と推定される会の記述とはほぼ同じである。どのような理由でこのような会を緒鞭会と同じ時期に持つ必要があったのかについては判然としないが、元益の記述によれば複数回開かれていた。

この後に元益は克昌の仲介により前田利保と面会することができ、その他にも多くの恩恵を蒙ったとしており、克昌との交流の深さをうかがい知るこ

とができる。

本文②

ここからは克昌が幕府の医官である畑中善良と知己であったことがうかがえる。畑中善良は、外科の分野で幕府に仕えていた医師であり、後には奥医師となった。具体的に両者がどのように交わっていたのかを確認することはできないが、ただ、克昌はアマチュアの同好の士とだけ交わっていたのではないことは、このこと以外にも例がある。それは『遠西舶上画譜』などにも記載されている通りであり、宇田川榕庵や「長崎薬種鑑定職役」の野田青葭などとの交流が知られる。これらのことは克昌がプロフェッショナルな人々とのつきあいを通して関心のある知識を得ようとしていたことの表れではないかと考える。

本文③

克昌は自らの趣味を通して多くの同好の士と交わっていたことは緒鞭会への参加や彼の記した図譜からもうかがい知ることができるが、ここに見られる木原兵三郎の名は管見の限りでは緒鞭会にも克昌の記したものにも見られない。

木原兵三郎・・名を白敏（註35）。旗本。石高は一〇五八石余。武蔵国荏原郡新井宿村や相模国上俣野村を知行地とした。博物学に関する事項は明らかではない。

この箇所では、克昌は元益に木原兵三郎を紹介し池上の屋敷を訪れて採葉するようにすすめたが、元益が訪れたときに木原は不在のため容易に入れてもらえず機知を働かせてその園中に入ることに成功した顛末を記している。木原の園中にはジュウニヒトエやゴマクサ、リンドウ、ミヤマオグルマの一種などがあり、園芸品種の栽培に関心があったかどうか定かではないが、植物または庭園に関して多少なりとも関心があったものと考えられる。

さて、ここで元益が訪れた「別業」について触れておく。木原家は現在の

東京都大田区にあった新井宿村を主要な知行地とし、そこに陣屋を構えており、それに相当すると考える。付近には八景坂や木原氏に由来する木原山などがあり、『江戸名所図絵』にも取り上げられるなど風光明媚な場所として多くの人々が訪れたという。『新編武蔵國風土記稿』の巻之四十二（註36）には「陣屋 池上往来ノ西。八景坂ノ下ニアリ。地頭木原専三郎カ陣屋ナリ。木原屋敷 陣屋ノ構ヘニツゞケリ。二丁四方バカリ。地頭専三郎ガ別業ナリ。カマヘノ内。スベテ林木繁茂シ。葉草ナドモ自ラ生セリ。コノ邊ヲ荒蘭カ崎ト號シテ。其名世ニキコエタルユヘ。江戸ノ人遊フモノ多シ。猶古蹟ノ條ト照シ見ルベシ。」とあり、十九世紀前半においては植物の豊かな地であったことが記されている。

本文④

元益が江戸に下ってから一年が経った天保十五年六月の記事である。彼は帰国を希望し、その途中で信濃の駒ヶ岳での採葉を望み、大垣藩主の許可を得たことを記す。信濃の駒ヶ岳は克昌と先祖を同じくする山村家の管理していた地域であり、克昌は元益の採葉に際して道案内のために家臣を派遣するよう便宜を依頼した。山村家は代々木曾代官を務めこの地域を実質的に支配していた（幕府直轄領、のち尾張藩領）。この時の当主は第十二代山村良祺（二七九八―一八六六）。

本文⑤

「緒鞭会」という名称は出てこないが、現在のところ緒鞭会として確認できる最後の記録と言われる箇所である（註37）。この日の出席者は前田利保、馬場克昌、田丸六蔵（寒泉）、武蔵石寿、関根雲停の五名に元益を加えた六名であり、記録の残っている他の会日と比べるとやや少ない感がする。この人数がどのようなことを物語っているのか確実なことは言えないが、天保七年に結成された緒鞭会が発足後八年目を迎えやや盛期を過ぎたと見ることもできるのではないだろうか。実際、会の有力なメンバーであった利保は藩政

の運営に苦慮し、また自らの健康も優れなかったようであり、この記事の翌年には富山への帰国を、さらにその翌年には隠居をそれぞれ幕府へ願い出て、嘉永元年（一八四八）には富山へ帰国する（註38）。しかし、元益が記すように「其後毎會召シテ出ツ」とあるようにこの回以降も何回かは開催されていた。

このおりに元益は利保所蔵の貝類コレクションを見せられたと記している。利保は江戸、富山双方の屋敷に花苑や菜圃を設けており、植物を対象とした『本草通串』『本草通串証図』が博物学分野での代表的な著作とされるが、その関心は幅広いものがあつた。貝類に関しては緒鞭会会員の武蔵石寿が大部な著作を残しているが、その著作『甲介群分品彙』『目八譜』には利保が序文を寄せており、貝類に関しても興味があつたと見ることもできるであろう。さて、ここで緒鞭会のあり方を考えるに当たって興味深い記述が二つ見られる。一つは出品物、もう一つはメンバーについてである。

元益の記述によると出席者が各々二品の品物を持ち寄って鑑定に供したとあり、ゲストである元益を除いたとしてもこの回には最低八品は出品されていたと推測できる。このことは数を増やすと探求に奥深さが無くなるとして戒めた『緒鞭会業軌則』とは少々趣を異にしているが、実際の記録である『緒鞭会品物論定纂』（註39）を見ると、参加者はおおよそ一人三点ずつの品物を出品しており、早い段階から「軌則」が厳密に運用されていたとは言い難い。また、残された記録にも「緒鞭会品物論定纂」などの各人の出品物記録と『秦皮図説』などの一つの事柄についての考究記録の二つのパターンがあり、この違いが何を示すのかなど緒鞭会についてはまだまだ考えなければならぬことが多い。

さてもう一つの点、メンバーである。緒鞭会については誰を正式な会員とするかという基本的なことさえ確実になっていないのが現状である。このことを明らかにするためにはもっと数多くの緒鞭会関連記録を発掘し検討する

必要があるが、元益の記述からすると曲直瀬養安院や小野蕙畝（註40）も参加していたとのことであるから、必ずしも大名や旗本などアマチュアの立場から関心を持っていた人ただけで終始していたのではなく、時には専門家も交えて会を運営していたことが分かるが、その具体的な関わり方については明らかになっていない。

本文⑥

月日は不明であるが弘化二年の記事（註41）。

秋田藩主佐竹氏の抱屋敷へ採薬に行く克昌に誘われ同行したことを記す。現在の東京都荒川区日暮里にあつたこの屋敷には道灌山の地形を活かして作られた「衆樂園」と名付けられた庭園があり、城北の名園として知られた（註42）。『江戸名所図説』にもあるように、この付近は「虫聴」の名所として知られ、また「ひぐらしの里」として江戸のひとびとの行楽地として賑わつたという。植物も豊富だつたらしく、岩崎灌園『武江産物誌』（文政七年序）には「道灌山ノ産」として一一八種の薬草が記されている。元益も江戸へ到着して間もなくの天保十四年六月に道灌山へ採薬に出掛けており、薬草の豊かな場所として知られていたようである。元益らが訪れた当時は第十代目の佐竹義厚が秋田藩の当主であり、彼が博物学に関心があつたかどうか定かではないものの、彼の正室は前田利保の養父の娘にあたり（註43）この辺りから緒鞭会会員とのつながりを感じさせる。同行した人物に「松平主水正君父子」「内藤左近君父子」がいたがいずれも同時代に複数いるため特定するには至らなかった。

帰途に、団子坂の園芸商・六三郎、同じく巢鴨の長太郎へ寄っている。後者の長太郎はよく克昌の図譜中に出てきており懇意であつたことが知られる。

本文⑦

元益が弘化二年の十月一日に江戸を発ち帰国する直前の記事である。克昌が元益の住んでいた芝將監橋の屋敷を訪れ、離別のあいさつをしたという。

年齢的には克昌の方が元益より二十歳ばかり年上であったものの、この箇所からは身分や年齢を超えて元益と接していたことが分かる。同様のことは克昌の著作『資生圃草木未詳品図説』の序文中に「藤渠先醒ニ教示ヲ乞」とあり、克昌が元益を「先醒」と呼びその豊かな知識を慕っていたことをうかがい知ることができる。

四 おわりに

以上「東海紀行」に見られる克昌関係の箇所を見てきたが、いくつかいまままで言われていないことが明らかになった。克昌の博物学活動を考える上で大切と思われる箇所について前項と重複するが列挙しておく。

- ① 資生圃の管理を藤里久作という人物がしていたということ。
- ② 克昌は緒鞭会とは別の物産会に参加していたこと。
- ③ 克昌は畑中善良などの専門家とつながりをもっていたこと。

- ④ この時期の緒鞭会と推測される会の内容が記され、曲直瀬養安院や小野蕙畝らのプロフェッショナルが参加していたこと。

「東海紀行」には以上に挙げたほかにも博物学に関する事項が多く含まれている。例えば黒田斉清が主催した鑑定会についての記事（天保十四年十一月二十三日）が挙げられ、岸和田藩主岡部美濃守以下十二名の武士や専門家が参加していたことが分かる。また、弘化二年四月開催の薬品会についても記され、博物学史に資するところはあると思う。

緒鞭会が江戸時代の自然科学の発達に果たした役割は直接的にはそう大きくないという見方もある。実際、会員の研究は対象物そのものが何であるかを考究するところに焦点が据えられており、それがどう役立つかというところまでは行っていないのは確かである。また、会員とその会の研究成果は会員及びその周辺の人々に写本として伝えられたものが多く、刊行されたのは前田利保の『本草通串』など一部分に過ぎず、それも広く普及するには至ら

なかつた。しかし、博物学史においてはこの時期になってプロフェッショナルな人々以外にも自然物に関心を寄せる人が出現し、当時の最新の学問であった蘭書を参考にしながらものの追究にあたった人々の存在は見過ごすことができないであろう。

従来より「緒鞭会」の名は知られてきた。しかし、その実態が資料に基づいて明らかにされてきたのは近年のことであり、まだまだ考える事柄が多く残されている。一見些細なことに見えるが、会全体を正確に把握するために会員個人の仕事についての探索も重要であると思う。また、会員の多くは公の立場として幕府の職に就いており、それらが私の興味に影響を及ぼしていたことは事実と考える（例として克昌が幕府の遣欧、遣米使節から海外産植物の種子を得たことなど）。よって彼らが幕府内でのどのような地位にあり、どのような人々と交流を持っていたのかなど承知しておく必要がある（註44）。

筆者は克昌を郷土ゆかりの人物としてその探索を始めた。緒鞭会会員の采地などの地元のほうが得やすい情報もあることと思う。会の全容を明らかにするためにも采地にゆかりある人々が彼らについて関心を持ち、地元ならではの資料の発掘も広く行っていただきたいものである。

註1 岩佐伸一「馬場克昌の『詩経物産図譜』について」(『岐阜県博物館調査研究報告』第二十号 一九九九年三月 一頁二頁)においても述べたが、馬場家は代々「大助」を通称としていた。本稿では十代目当主の馬場大助克昌(一七八五〜一八六八)であることを明確にするために通称ではなく名の克昌を採った。ちなみに従来活字化された克昌関連の文献においては表記は「馬場大助」が多く、他に「馬場仲達」「資生」などがある。

註2 「遠西船上画譜」中にはペリーや幕府の遣米使節が持ち帰った種々入入手し、栽培したとの記述が見られる。また、「群英類聚図譜」には台命で出かけた関州巡察の折りにも植物の入手に努めており、公務中でも植物に関心を寄せていた事実が記されている。

註3 岩佐前掲書 二頁

註4 誰が正式な会員であったかについては平野満「天保期の本草研究会「精観会」―前史と成立事情および活動の実態―」(『駿台史学』第九十八号 一九九六年九月)において考察が示されている。

註5 明治以降に活字化された精観会または会員に関する文献としては伊藤圭介「博物学起源沿革説」(『東京学芸会院雑誌』第一編第四冊 一八八〇年三月出版)が早いものと思われる。ここでは設楽妍芳、馬場大助(≡克昌)、佐橋節翁、飯室榮圃、田丸泉泉、武蔵石寿らの名が挙げられており、そのうち妍芳、榮圃、石寿、克昌については数行の解説が付されている。ただし、誤植か主介の記憶違いかはわからないが、現在から見ると間違いとされる箇所がある。一例を挙げると以下の通り。「設楽芝陽」はその存在自体に疑問が提示されている。(中村慎里「設楽芝陽は存在したか」『生物学史研究』第五十九号 一九九五年。磯野直秀・中村慎里「実在しなかった本草家「設楽芝陽」『科学医学資料研究』第二六四号 一九九六年七月など)「馬場大介 美濃守」、正しくは「馬場大助 筑前守」。「佐藤節翁」、正しくは「佐橋節翁」。この文章では各人の覚え書き程度にとどまり精観会全体を見渡した記述は見られない。

註6 福井久蔵「諸大名の学術と文芸の研究」(厚生閣 一九三七年)、日本学士院「明治前日本生物学史」第一巻(『日本学術振興会 一九六〇年)など。

註7 佐々木利和「博物館書目誌稿 一帝室本之部博物館編」(『東京国立博物館紀要』第二十一号 一九八六年)、磯野直秀「日本博物学史覚え書 Ⅲ」(『慶応義塾大学日吉紀要』自然科学 No.十九 一九九六年三月)、平野満「天保期の本草研究会「精観会」―前史と成立事情および活動の実態―」(『駿台史学』第九十八号 一九九六年九月)などが挙げられる。他にも上野益三「博物学史散歩」(八坂書房 一九七八)、同「忘れられた博物学」(八坂書房 一九八七年)、「江戸博物館集成」(平凡社 一九九四年)など一般の読者をも意識した図書でも取り上げられる機会が多くなった。

註8 「江馬活堂傳」(一八九二年 岡田李之助写本 杏雨書屋所蔵)による。本書は遠藤正治「資料紹介 江馬活堂著『飯沼慈翁』と『江馬活堂伝』」(『齋齋研究会だより』No.二十七 一九八五年二月)に掲載されている。

註9 註8参照

註10 杏雨書屋所蔵

註11 杏雨書屋所蔵

註12 その他の事情に関しては、末中哲夫「大垣藩医 江馬元益」(『日本洋学史の研究Ⅱ』創元社 一九七二年)や青木一郎「岐阜県蘭学医学歴史散歩」(岐阜県医師会 一九八三年)に詳しい。

註13 国立公文書館内閣文庫、蓬左文庫、岐阜県図書館等に所蔵されている。詳しくは末中哲夫「大垣藩医 江馬元益」(『日本洋学史の研究Ⅱ』創元社 一九七二年)の三〇五〜三〇六頁を参照。

註14 「藤澤漫筆」に関する研究は「江馬文書関連著作・講演目録」(『江馬文書研究会の二〇年』江馬文書研究会編 平成四年 四五一五〇頁)のなかに挙げられている。それによると講演や発表に取り上げられた事が多いようであり、管見の限りでは本随筆について総合的な研究が活字化されたことは確認できていない。また、遠藤正治氏のご教示によると、

江馬文書研究会にて本書の講読をされていたとのことである。内容の細目は「藤澤漫筆総目次」(江馬庄次郎・遠藤正治編 江馬文書研究会 一九八三年)に詳しく記されている。註14に掲げた「藤澤漫筆総目次」においては「東海紀行」「東海漫筆」「西帰紀行」と細分化されているが、元益自筆本には「東海紀行」「西帰紀行」の二つの標題のみが記されている。青木一郎「岐阜県蘭学医学歴史散歩」(岐阜県医師会 一九八三年)一六八〜一七七頁による。

註16 上野益三「博物学史散歩」(八坂書房 一九七八年)二二〇頁。

註17 国立国会図書館所蔵。

註18 馬場大助家の伝は「寛政重修諸家譜 卷二(第四刷) 続群書類完成会 一九八〇年)の三九二〜三九七頁に掲載されている。

註19 「瑞浪市史 史料編」(瑞浪市 一九七二年)に掲載されている。同書一四頁に克昌及び兄弟の記述があり、こちらの方が「寛政重修諸家譜」より詳しい。

註20 上野前掲書 二二〇〜二二三頁。現在の東京都港区芝公園四丁目の一に相当する。

註21 「諸向地面取調帳(一)」(内閣文庫所蔵史籍叢刊 第十四巻 汲古書院 一九八二年)二九六〜二九七頁。

註22 上野前掲書 二〇二頁。

註23 岐阜県博物館特別展図録「花と鳥のイリュージョン」(一九九七年)に花鳥画を六点掲載した。他にも「観世音菩薩尊像」「雲龍図」「羅漢図」(いずれも天猷寺所蔵)などが確認できる。

註24 「松鶴図(個人蔵)は長崎派がよく用いた謎掛けにつながる吉祥的な画題が主題になっている。前掲岐阜県博物館図録三〇頁参照。

註25 克昌の画事を語るに際してもうひとつ欠かさないのが関根雲停である。詳しくは小林忠「関根雲停」(『彩色江戸博物館』三七〜三八四頁 平凡社 一九九四年)を参照。掲出書には紹介されていないが高知県立牧野植物園にも多くの画稿が残されており、今後検討する必要があると考えている。

註26 「動物図譜」(富山市郷土博物館所蔵)には「精観会業軌則」(平野前掲書 一三〜二二頁)が成立する以前より克昌は前田利保と共に「物産会」と称する会に参加していたことが記されているが(富山市郷土博物館特別展図録「お殿様の本草学」 一九九八年 二二頁)、元益の記述にある「君ノ社中物産会」には利保が入っていないなどの点からしてそれとは違う別の「物産会」であろう。

註27 貞直の跡を継いだ常直の代になると、麻布白金台に拝領屋敷を持っていたことが「諸向地面取調帳」から分かる。

註28 国立国会図書館所蔵。著者などは題僉による。小曾戸洋「曲直瀬養安院家の人々」(『漢方の臨床』第三四巻第一二号 一九八七年十二月 八七〜一〇六頁)には「本草問答録」に見える「江馬春齡」を江馬元益(蘭齋)に当てているが、「江馬春齡」の答えに見られる人物名からすると元益の孫・江馬元益が適当であると考えられる。

註29 平野満「天保期の本草研究会「精観会」―前史と成立事情および活動の実態―」(『駿台史学』第九十八号 一九九六年九月)中の「精観会 会日および出席者一覽表」による。

註30 磯野直秀「日本博物学史覚え書 Ⅲ」(『慶応義塾大学日吉紀要』自然科学 No.十九 一九九六年三月 四四〜五七頁)の五三頁の記述による。『国書人名辞典』(岩波書店 一九九三年)には「生没年未詳」とある。

註31 精観会の記録は出席者の雅号で記されており、現在でも雅号の主が判然としていないこともある。場合によってはそれらに当てはまるものかもしれないが現在のところ不明である。

註32 平野前掲書 一三〜二二頁に詳しい。

註33 「精観会合品物論定纂」にある天保八年九月八日の会には十一点の物品が記録されており、実際の記録を見てみると必ずしも規則通りとは言いがたいようである。

註34 この時点での木原家当主は七郎三郎白圭だが、年齢からすると先代の兵三郎白敏(一七

註 36

七九一八五〇、「寛政重修諸家譜」「大田区史年表」による）と克昌が交流を持っていたと推測する。また白圭は通称を「七郎三郎」とし「兵三郎」を名乗ってはいないのでこの記述にある「木原兵三郎」は白敏と考えた。

国立公文書館内閣文庫所蔵、引用箇所は巻四十二の三十六丁裏に記載されている。なお、本部分を含む住原郡の記述は文化七年に草稿が成り、文政十年に改訂が加えられた旨が首巻のうちの「例義」部分に記載されており、十九世紀前半のこの付近の様子をうかがうことのできる資料と考えた。

磯野直秀氏のご教示による。

註 37

富山市郷土博物館特別展図録「お殿様の本草学」一九九八年（四四―四五頁）。

註 38

国立国会図書館所蔵。天保八年九月八日、同年十一月七日、同年十二月九日に開かれた

註 39

緒輦会の記録。

註 40

曲直瀬養安院については、このころ曲直瀬正隆（一七七二―一八四八）とその子、正貞（？―一八五八）の二人が可能性を持つ人物と考えられるが、正隆は既に天保十四年に致仕しており、元益記述当時の養安院家当主・正貞であったと考えたい。その根拠としてひとつは国立国会図書館所蔵「本草問答録」が正貞と元益の問答を記録したものであり、お互いの交流が確認できること。もうひとつは正貞の著作の目録を写した「群芳写真」（国立国会図書館所蔵）に「六十一 菌 天保十三年 資生園所産」との記述があり、緒輦会会員との交流があったことが知られるからである。「群芳写真」本文の原本の所在は確認できなかったが平成十一年十一月の東京古典会にて同書本文の写本と見られるものを見つけた。（同会目録No.三四七）そこには図に加えて「菌 天保十三年資生園所産」とあった。なお、杏雨書屋所蔵の「群芳写真」は同名ではあるが内容については共通する点がなく別本と考える。曲直瀬養安院家については、小曾戸洋「曲直瀬養安院家の人々」（漢方の臨床）第三四巻第一二号 一九八七年十二月 八七―一〇六頁）に詳しい。小野恵敏は、小野蘭山の孫に当たる。

註 41

「イワギリサウ花ヲ開ク」「モクタチバナ紅実ヲ結フ」とあるところからおおよそその季節は推定できそうであるが、前者は夏に開花し、後者は秋に結実するとされるところから季節が完全には一致しないように思う。

現在の開成中学・高校およびその近辺の宅地が佐竹家抱屋敷に相当する。

註 42

前田利保の父は第八代藩主・利謙だが、亡くなるときに長男の利保が幼少であったため、分家から養子を迎え第九代藩主に利幹が就いた。その娘が佐竹義厚の正室となる。

註 43

例えば、天保八年五月十二日から同年十二月九日までの緒輦会記録（「緒輦会業論定作物纂」・「緒輦会品物論定纂」による）には前田利保の名は見られず、一見すると利保の緒輦会への関わりが深くないと取られかねない。彼はこの時期、藩主としての公務―天保飢

註 44

饉の対策―のため帰国しており江戸にはおらず参加できなかった。

末尾になりましたが、本稿をなすに当たり、磯野直秀氏、江馬寿美子氏、遠藤正治氏（岐阜県立華陽高校）、馬場宗信氏（天猷寺）のご教示、ご高配を賜りました。資料の閲覧に当たっては高知県立牧野植物園牧野文庫、国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、武田科学振興財団杏雨書屋のお世話になりました。また、財団法人日本科学協会笹川科学研究助成の援助を受けました。記してお礼を申し上げます。

本文①（天保十四年・月日不明）

一日巢鴨花戸長太郎ノ家ニ至テ植木ヲ見ル且ツ余カ舎赤坂溜池ニノ此地ニ遠ク数々来ルニ便ナラサルヲ言フ長太曰君ノ近隣馬場大助君アリ物産ヲ好ミ草木ヲ多ク養ハル往テ見ヨト仍テ藤里久作馬場君ノ臣團中ノ奉
行実ハ大助君ノ弟ヲ紹介トノ草木ヲ拜見ス花壇盆栽処々ニ在リ又庭中松樹假山アリテ海上ヲ臨ミ絶景ナリ又大助君ニ見ユ寛祐ニノ謙讓大ニ他ヲ容ル、ノ人ナリ君ト本草ヲ談スル、数時大ニ君ノ意ヲ得ル是ヨリ数々出テ、其写生セラル、艸木ノ図ヲ見ル君ハ雪齋侯ノ門人ニノ画ニ工ミニノ見ル所ノ中木尽ク図セラル又別ニ帖ヲ製シ珍草ヲ写真セラル美麗言フベカラズ富山侯之二序セラレ亡羊先生跋アリ君草木ヲ惜マス余カ望ム所皆ナ之ヲ与ヘラル実ニ大公王屋甚感佩ス君ノ社中物産会アリ其人ハ松平主水正、土屋弥学、長谷川甚兵衛、佐橋兵三郎、飯室庄左エ門、リ君余ヲ延テ社中ニ入レラレ毎会席ニ陪ス此会ヤ各奇品五種ヲ携ヘ鑑定シテ其甲乙ヲ記スルナリ又君余ヲ推シテ富山侯ニ見ヘシメラル其他恩遇ヲ蒙ル、一挙テ数フベカラス

本文②（天保十四年月日不明）

官医畑中善良君ハ能ク西書ヲ読マル馬場君ノ紹介ニ因テ至リ調ス西書数部ヲ出シ示サル「レーデンコンスト」「スプラーカコンスト」ノ珍書アリ君謙遜諸官医ノ如クナラス余カ舎ニモ来臨セラル近コ口奥御外科ニ擢デラル

本文③（天保十五年四月）

池上木原兵三郎君別業艸木多シ馬場君余ニ採茶ヲ勸メラレ且日余カ名ヲ唱ヘ往カハ別業ニ入ル、一得ヘシト辰年四月往テ守邸ヲ訪ヒ馬場君ノ言ヲ伝フ時ニ主人不在婦曰文引ナキモノ此邸ニ入ル、一許サスト余以為ク遠ク此ニ至リ空ク婦ノ遺憶ナリト乍チ一計ヲ出シ錢二百銅ヲ以テ菓子料トメ婦ニ与ヘ且ツ曰ク若シ余此邸ニ入テ後日君家若シ難スル所アラバ馬場君ヲ以テ謝セント婦漸ク領シ一小女ヲメ余ヲ延テ山中ニ至ラシム此山夏枯草ヤキコ玄參ゲンサン胆旋覆花ニヤマオグルマ一種百合蒼木ホアリ玄參ヲ初テ見ル一根ヲ採リ婦ニ謝ノ出テ目黒ニ到ントス途中虎掌南柴胡コホトヲ採リ目黒ニ至テ旗亭ニ飲ム人皆虎掌ノ花ヲ奇トス

本文④（天保十五年六月）

同六月瓜ノ期ニ至テ余郷ニ帰ラント欲シ且ツ木曾路ヲ旅行シ駒ヶ嶽ニ登リ採茶セン、一君侯ニ乞テ許サル駒ヶ嶽ハ馬場君ノ同姓山村君ノ採地ナリ故ニ馬場君山村君エ書ヲ贈リ其臣ヲ出メ余カ採茶ヲ導カシメン、一囑セラル

本文⑤（天保十五年七月二十四日）

辰七月念四日大助君富山侯ニ余本草ヲ好ム、一ヲ談セラル侯武藏石寿ヲメ余ヲ召ス出テ見ユ此日侯邸会アリテ席上大助君田丸六藏武藏石寿雲停画エアリ侯ト本草ヲ談スル、一少時介品数函ヲ見セラル帰ルニ臨テ富山製ノ紙及枝折

楊枝ヲ賜フ其後毎会召シテ出ツ此会各二品ヲ携ヘ互ニ鑑定シテ其甲乙ヲ録スルナリ或ル会ニ曲直瀬養安院小野蕙畝モ出テラレタリ余シイボルト和産本草名目ヲ蔵スル、一君侯ニ言フ侯之ヲ写シ与ヘヨト命セラル曰テ写シ呈ス謝スルニ八丈一反ヲ以セラル侯謙遜能ク人ノ言ヲ容レラル余ガ如キ同室ニ延テ談話セラル又文学アリ且ツ善良畑中君ト西書ヲ会談セラル西書ノ蔵本数十部アリ一日大坂屋清雅手板発蒙ノ品ヲ見セラル其他蔵品饒多アリ

本文⑥（弘化二年月日不明）

一日馬場君佐竹侯日暮シノ別業ニ採茶セラレ余ヲ誘ハル当日学館講日ナリ講後ヨリ日暮シニ至ル君已ニ先ニ在リ外ニ松平主水正君父子内藤左近君父子同行也此山中クマガヘサウアリ又山生天名精ヲ初テ採ル帰路団子坂花戸六三郎ニ至ルイワギリサウ花ヲ開ク甚タ美也又狗掾数盆有リ而メ巢鴨ニ往ント議セラル余時ニ駒込伊勢屋十兵衛室ヲ療治ス幸ニメ一診シテ巢鴨花戸長太郎ニ至ル残懐ナルカナ主人他出セリモクタチバナ紅実ヲ結フヲ見ル

本文⑦（弘化二年月日不明）

発程前大助馬場君忝ク余ガ厩舎ウマヤニ枉駕セラレ暇ヲ告ラル蓋シ大助君ハ貴戚ナリ余カ如キ賤者ノ居ヲ顧セラル、一実ニ榮トスベシ

*字体は原則として当用漢字を用いたが、異体、俗字、合字はそのままとした。

表① 江馬元益「東海紀行」「西帰紀行」に記載された主な事項（順序は記載順とした）

年（西暦）	月	日	事項
天保十四年（一八四三）	六月	十六	大垣を出発する。名古屋にて伊藤圭介と会う。
	六月	十七	府中の花戸にて「ダルマガク」を得る。
	六月	十八	駿河・原にて植松与右衛門を訪れ邸内を見学し、札として「セリヤーハン」を贈る。
	六月	十九	小田原近郊梅沢にて「ミヤマグルマ」を得て、後日山本亡羊に質問する。
	六月	二十	江戸に到着する。
	六月	二十一	道灌山に採葉する。
	六月	二十二	坪井信道、西島蘭溪、黒川良安らと隅田川にて納涼する。
	六月	二十三	青山侯侍医・中泉東菴を訪れる。
	六月	二十四	宇田川榕菴を訪問し、黒田斉清の物産会に出席することを勧められる。
	六月	二十五	黒田斉清と面会し、邸内の植物と所蔵する洋書、磁石などを見る。
	六月	二十六	黒田花戸長太郎を訪れ馬場大助（克昌）を紹介される。その後面会し、克昌邸内の植物や写生図を見る。
	六月	二十七	黒田斉清邸での鑑定会に出席する。
	六月	二十八	黒田斉清に幕府医官・小島春菴を紹介され、後日面会する。
	六月	二十九	小島春菴の紹介にて多紀安良と会い、医学館講師に推挙の意向を伝えられる。
	六月	三十	馬場克昌の紹介にて幕府医官・畑中善良を訪問し洋書を見る。
	七月	一	柿元小八郎と道灌山にて採葉をする。
弘化元年（一八四四）	三月	一	西洋家・益城良哉と会う。
	三月	二	馬場克昌、木原兵三郎を紹介し採葉を勧める。
	三月	三	池上の木原兵三郎邸を訪れる。
	三月	四	金杉八百屋が持つて来た植物を武蔵石寿に質問する。
	三月	五	岡部老公（前岸和田藩主）の邸を訪ね介品草木を見る。
	三月	六	帰国を希望し、その途中に木曾の駒ヶ岳での採葉のために馬場克昌が山村家に便宜を依頼。
	三月	七	大垣藩主より帰国延期の命令を受ける。
	三月	八	幕府より医学館にて講書の命を受ける。
	三月	九	拜謁医師・橘尚賢と共に讃岐侯の白金邸内の薬園を訪れる。
	三月	十	馬場克昌の紹介にて前田利保邸で開かれた会に出席する。その後毎回出席する。
	三月	十一	有馬敬三郎の侍医・秋浦誠齋から山本亡羊の講義録を借り筆写する。
	三月	十二	久留米侯侍医・越野松園が来訪する。
	三月	十三	苗木侯侍医・結城恵民が来訪する。
	三月	十四	大橋利左工門、田結宗伴と共に採葉に出かける。
	三月	十五	薩摩侯侍医・足立潘如に面会する。
	三月	十六	曲直瀬養安院と面会する。
	三月	十七	医学館にて講書を行う。
	三月	十八	辻元崧の誘いで伊沢長安、洪江道純らと宴を同じくする。
弘化二年（一八四五）	一月	一	医学館発会に召される。
	一月	二	阿部侯侍医・伊沢長安を介して官医・田村氏の蔵書を書写する。
	一月	三	馬場克昌らと共に秋田藩主佐竹侯下屋敷にて採葉する。
	一月	四	医学館薬品会が開かれ、鑑定手伝となる。
	一月	五	広尾付近にて植物採集をする。
	一月	六	品川介屋新蔵にて貝数品を得る。
	一月	七	拜謁医師講師ら、紅葉山文庫の医術列伝の出版を企画し、元益も加わる。
	一月	八	坪井信道らと船遊びをする。
	一月	九	奥平侯侍医・前野東菴に教えを請われる。
	一月	十	苗木侯侍医・小栗元禎が来訪する。
	一月	十一	医学館講師を辞する。
	一月	十二	婦国前に馬場克昌が来訪する。
	一月	十三	江戸を出発する。
	一月	十四	江戸島にて介品数品を買う。小田原の海浜にて採葉する。
	一月	十五	箱根にて採葉する。
	一月	十六	大垣に到着する。

表② 馬場克昌著作序跋一覧

番号	名称	点数	序文款記	跋文款記	序跋年月日	備考
①	群英譜	三	天保甲辰孟春／富山侍従菅原利保題（印二顆）	（跋文なし）	（序）天保一五年（一八四四）一月	題字は鳥津斉彬 東北大学付属図書館所蔵
②	群英類聚図譜	六三	嘉永庚戌秋七月／平安山本世孺撰（印二顆）／男秀夫謹書（印二顆）	（跋文なし）	（序）嘉永三年（一八五〇）七月	武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵
③	群英類聚図譜下	一五	嘉永壬子孟春／資生源克昌（印二顆）	（跋文なし）	（序）嘉永五年（一八五二）一月	武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵
④	資生園草木未詳品図説	一	嘉永七季夏／資生	（跋文なし）	（序）嘉永七年（一八五四）六月	国立国会図書館所蔵
⑤	遠西舶上画譜	一〇	安政乙卯花朝江都栗本苦益撰（印二顆）	（跋文なし）	（序）安政二年（一八五五）二月一五日	東京国立博物館所蔵
⑥	詩経物産図譜	五	安政四年丁巳仲春／資生源克昌撰（印一顆）／蓮仙老々清書（印一顆）	安政丁巳季冬之日／舊臣濱田福田正／徳謹識（印二顆）／佛巖真逸林鼎玉書（印二顆）	（序）安政四（一八五七）二月 （跋）安政四（一八五七）一二月	天猷寺所蔵
⑦	虫譜	二	（序文なし）	（跋文なし）		上下冊ともに題字は高島秋帆 東京国立博物館所蔵
⑧	貝譜	二	（序文なし）	（跋文なし）		上下冊ともに題字は高島秋帆 東京国立博物館所蔵
⑨	博物館獣譜のうち	二	（原初形態不明）	（原初形態不明）		田中芳男編 克昌制作当初の姿をとどめず 東京国立博物館所蔵
⑩	本草図譜	五〇	（序文なし）	（跋文なし）		岩崎灌園著書の写本 克昌による加筆訂正あり 東京国立博物館所蔵
⑪	魚譜	一	（序文なし）	（跋文なし）		題字は馬場克昌 絵は関根雲停筆 東京国立博物館所蔵

*序文款記、跋文款記は原文のままとした。／は改行を示す。（ ）内は筆者による。
*楮籙会記録、楮籙会会員として編纂に関わった書籍は除いた。
*名称は題名または序文によった。